

「目標を目指して」

七里教会 2022年6月26日

フィリピの信徒への手紙 3：12-21

佐々木 佐余子

このフィリピの信徒への手紙を執筆された時期は、パウロが第2回目の伝道旅行を終えたころでした。その頃のパウロは使徒として仰がれ後進の育成をしていたのですが、3章の12節を読むとこのようにあります。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。」と書いています。圧巻の思いで読みました。そういうパウロの心の内、心情を知って驚きます。パウロは使徒として生き、教師として仰がれていたのです。普通だったらそれなりにふるまうでしょう。ところがパウロは違うのです。「わたしは完全なものになっているわけではありません」と言い切るのである。そこがパウロのすごさですね。ここばかりではなく、ローマの信徒への手紙でもそうです。「内在する罪の問題に関して」なのですが、「わたしは、自分の内には、つまり、わたしの肉には善が住んでいないことを知っています。善をなそうとする意志はありますが、それを実行できないからです」（ローマの信徒への手紙7：18）有名なところですが、使徒と仰がれている人が、手紙で堂々と公表する、公表できるすごさは、パウロが本当にキリストに救われているからこそ、言い切れることだと思います。でなければ、どうして使徒の面目をつぶすことを語れるでしょう。

パウロは元々、人間的には誇りある人でした。フィリピ書の3章5節を見ると、「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人」と書いています。そして、律法の義については、非の打ちどころのない者でした、と誇ります。けれど、パウロはそういう人間的誇りを、キリストの故に損失とさえみなすようになったのです。そして、キリストのゆえにわたしはすべてを失いましたが、それらを塵芥とみなしています、とさえ言うのです。自分の今までの経歴、業績、学歴、家柄を誇りと思わなくなったのです。そこがまた、普通の人間とは違いますね。

2節にあるように、「あの犬どもに注意しなさい」と警告しています。単なる切り傷でしかない割礼をしている人たちを注意しなさい、と書いています。彼らは一体どういう人たちなのでしょう。その頃のフィリピ教会のクリスチャンは様々な人たちがいたのです。律法をあまりにも大事にして、肝心のイエスさまの福音よりも大切に思っているクリスチャンや、ユダヤ教徒から回心した人たちは、ユダヤ教の習慣、例えば安息日を大事にして日曜日に行動を制限してしまったり、食事制限をしてしまったり、ついユダヤ教徒の癖が出てしまって、まだへその緒がとれていないクリスチャンがいたと思うのです。そして、自分だけでそう思っていればいいけれども、他のクリスチャンを引っ張ってかき回すのです。すると秩序が乱されます。ですからあの犬どもを警戒しなさいと言ったのです。パウロは彼らを「よこしまな働き手」と書いていますが、よこしまとは、真理に外れていて正しくないことを言

うのですが、彼らは律法を守ることにだけ心を奪われ、クリスチャンとして少しも実を結ぶことのない人たちだと考えました。またキリスト不在の間違った教えを熱心に説き、自分の宣伝ばかりする教師を「よこしまな働き手」たちと呼びました。そういう人たちは、自分は割礼をしている立派なクリスチャンだからと自らを誇ったのです。そして割礼をしていない異邦人クリスチャンを強要して混乱させました。パウロはそういう人たちを一刀両断に切りつけ、キリストの福音の光の中では、もはや割礼は単なる傷にすぎないから無用であると退けました。それはどんなに恩恵だったでしょう。そして、福音は異邦人の中で非常に拡大しました。もし、割礼を受けなければクリスチャンになれないとしたら、いまごろ教会は女性ばかりだったのではないのでしょうか。旧約時代から割礼を受けることは、神との契約を結ぶ印となるのです。ですから、割礼の代わりに洗礼・バプテスマを受けることによって、神と契約を結ぶ証となるのでした。わたしたちはバプテスマを受けることによって神と契約を結び、神の民とされるのです。ですからバプテスマを受けた者は生涯神の民なのです。その人が忘れて教会に行っていないなくても、神の民なのです。また、何かして法に触れてもその人は神の民なのです。その人のため牧師は祈り懺悔に悔い改めに導くでしょう。

宗教改革者のマルティン・ルターはこう言っています。「私は博士であり、教会では説教者であり、他の人に負けない学問もあり経験を積んでいる。それにもかかわらず、私のなすことは教理問答を学んでいる子供と同じで、朝毎に、そして暇さえあれば十戒、使徒信条、主の祈り、詩編などを読み、また唱えているし毎日研究をする。そうしてもまだ、なかなかキリストに達することは出来ない。だからいつまでも教理問答の子どもであり生徒なのだ。でも喜んで子どもであり生徒でいようと思う」と述べているそうです。あのルターでさえ謙虚な気持ちを忘れないのでした。パウロも然り。パウロのように目標を目指してひたすら走ると神が捕らえてくださる。イエスさまが支えてくださるのです。15節にあります、「だから、わたしたちの中で完全な者は誰でも、このように考えるべきです」と語っています。フィリピ教会の人たちは、異教的な環境の中で、どういう態度が信仰生活なのかを具体的に知りたいと考えていました。模範的な人を見ないとわかりにくいですね。ですからパウロは私を見なさい、わたしのように体を伸ばしてキリストを目指しつつ走り続けることが大事なのだと教えました。18節にあるように「キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです」と言っています。この言葉は十字架の福音に逆らうユダヤ人や異邦人のことを指しているのではなく、勿論そういうこともあるけれども、福音を聞いてはいるけれども、異教の習慣や影響を受け感化されているクリスチャンのことです。パウロは涙ながらに警告しています。ただキリストを目指して走りなさい。わたしたちの中にある古い人、古い人格は完全にはなくならないけど、日ごとに古い人は死んで新しい人にならなければならない、と教えました。丁度、昆虫が脱皮するようにです。ある人から聞いた話ですが、蛇が脱皮する時、非常に苦しく痛く涙を流すそうです。実際見たことはないのですが正確にはわからないけれど、あの長い皮を脱ぐのですから長時間かかるでしょう。するっと抜ければいいですけど、古い表皮を脱ぐのはセミが殻を脱ぐとは違うのでしょうか。私たちも持って生まれた性格

を完全に脱ぐのは難しいともいます。古い我、しがらみを断ち切るのは本当に難しいと思います。今まで律法に生きてきた人が、それを断ち切って新しいキリストを受け入れることは至難の業だと思うけれど、パウロは目標を目指して走り続けました。20節をご覧ください。「しかし、わたしたちの本国は天にあります。」この御言葉は本当に慰められます。天には神さま、イエスさまがおられます。けれど、「わたしたちの本国は地下にあります」となったらどうでしょうか。がっかりですね。地下には恐ろしいモンスターがいるとユダヤ人は考えていたのです。キリスト者が亡くなると、よく帰天すると言います。天に帰るのです。普通は死亡した、亡くなったと言いますが天に召されたと言うと、心穏やかになります。病気で苦しんだけれど「今頃は天の神さまのところに帰って豊かに平和に過ごしているのだろう」と思うと安心します。本国とありますが、口語訳では国籍と訳されています。パウロの時代は、国籍は市民権のことでした。フィリピの町はローマの属州として誇りを持っていました。当時ローマの属州は税金や法律上の特別な権利を持っていました。それで、フィリピの教会のクリスチャンは、パウロが天に国籍を持っていると聞いた時、それが具体的にどういう意味なのかを感じたのかもしれない。この地上では流浪の民だけれど、クリスチャンは天に誇るべき国籍があるのだから、そういう身分にふさわしい生活を送らなければならない、と思ったのです。国籍と言う語は共同の生活を予想します。私たちは共同体の仲間として、他の人々を必要としているのです。仲間の集合体は教会です。その教会は天に国籍を持っている教会として立たせられているのです。そして「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています」と信仰を述べています。21節に「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」と結んでいます。私たちは神さまから義の冠をいただきたいと願っています。地上での役目を終え、本国に帰った時、「よくやった。あなたはわたしに忠実だった」と義の冠をいただきたいと希望しているのです。ところが「あなたのことは知らないから、あっちに行きなさい」と言われたら困ります。それで、私たちのこの卑しい体を、イエスさまの栄光あるみ体と同じ体でなくてもいいから、似た体として変えていただき、天の国に迎え入れていただきたいと心から願っているのです。そのために目標を目指して、地上での信仰生活を共に歩ませていただきたいと思います。

私が思うのに、キリスト者の信仰はゆく先々に希望があるからいいのだと思います。世間一般の人々は、死んだら終わりであり、死んだらもう一巻の終わりだと考えている方が多いのではないのでしょうか。もう死んだら灰になって終わり。それだと夢も希望も無くなってしまふ。たとえ、教会に行っていない人でも死んだら神さまのところに行く、と私は思っているのです。私の両親は教会に行っていなかったけれど、今は天国にいて、私が死んだらそこで会えると思っているのです。どういう形だかわからないけれど、パウロの言うように人間の卑しい体を、ご自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのだと思っているのです。天国では宗教の違いはないのではないかと、思うのです。天国にそれぞれの入り口があって、ここはキリストさんの人たちが入ってください、ここはお寺さんの人が入ってください、ここは

神社の人たちが入ってください、ここは創価学会の、ここは天理教の、と分けは無いと思うのです。皆一緒だと思うのです。そうでないと、夫婦で別の信仰を持っている人は会えなくなるでしょう。天国で、家族みんなであって話したいですから。これは余談になります。

よく人生をマラソンレースにたとえられます。お正月に駅伝マラソンが行われます。よく長い距離を走れると感心するのですが、マラソンランナーは苦しそうな顔をして走りますね。最後のゴールで倒れる人もいます。皆さん全力で走りぬくのです。パウロはコリント書で言っています。「あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。」

この賞は走って一等賞の者だけが得るのではなく、遅くても早くても目標を目指して走る者に与えられる義の冠です。人にこのような目標があると、変な横道にそれなくていいですね。